『國民新報』1939年9月10日

[主張]　歐洲の動亂　－白人のいはゆる正義とは？―

　のより二十五、それがつてより二十、はび[の]とした。のをにしつゝぐる二十はの、のにやしたである。だ、のによつてになるかでるかれぬとはふものの、にでもなつたらはのそれよりもずつといものであらう。してそののはに[よ]にあるのだ。

　かゝるのるべきを、おに十二に悉しつゝも、をしなければならないにのがあるのだ。はとずるものをせねばならず、はのをへけなければまでのがてない。がればにはコルシカやチユニジアをしてイタリア＝イレデンタののにまるゝことゝとなり、ロシアは〝の″がさへしてればのがはれるのである。かくてはるのだ。の、の、これがのとなつてとなるのである。

　そもそもののをなしたのが、ヴエルサイユのの、なきであつて、そのがである。は（？）のをつて一りにをしたのだ。チエツコとかとかののいをきまで[に]りげてのたらしめたにのなるはかれてあつたのだ。チエツコとふのにをるべかりしはやのためににたざるをなくなつたのである。がのためとかや、千萬だ。のとのシノニムだ。

　なるのはされねばならぬ。それがであらうとであらうとにのたる[[1]](#footnote-1)たることにりはない。らくは、のははるゝることであらう。のりに、がにはれることは々とてもむでなくてはならぬ。

　モロトフの云ひ分を借用すれば、歐洲の紳士達が闘つて居る間に、吾々はアジアの仕事を奇麗に仕上げよう。數世紀間呪はれたる白人の桎梏に、苛まれたアジア諸民族に、自由の日を與へるのは今である。そして〝光は東方より″の古言が今日を豫言したことを、かの傲慢不遜なる歐洲人に知らしめよう。

1. 「徴便」は単行本で「徴候」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-1)